

# スウェーデンの保育実践にみる 教育的ドキュメンテーションの活用について

水野佑規子

## Learning from Early childhood Education and Care in Sweden

### Using of Pedagogical Documentation

Yumiko MIZUNO

スウェーデンは OECD 加盟国の中でも保育の質が高い国として知られている。その保育方法は、子どもが興味・関心を持ったテーマを保育者と共に長期間探究していくプロジェクトを通して得る学びのプロセスをドキュメンテーションとして記録し、活用することである。スウェーデンでは、この記録としてのドキュメンテーションを基に同僚の保育者や子ども、保護者と共に話し合い、リフレクションを行う活動のことを教育的ドキュメンテーションと呼んでいる。本稿では、スウェーデンの株式会社ヴァーガ・ヴィリアが運営する就学前学校に勤務する2名の保育者の講演内容の詳細を報告し、教育的ドキュメンテーションを活用することの意義について考察した。

Keywords: 教育的ドキュメンテーション、保育実践、スウェーデン、リフレクション

Pedagogical documentation, Early childhood Education and Care, Sweden, Reflection

#### はじめに

近年、国際的に幼児教育への関心が高まっている。その背景には、質の高い保育がその後の子どもや国の将来に良い影響をもたらすことを明らかにした多くの研究成果の影響がある (OECD, 2011)。そして、21 世紀の「地域基盤社会」を生き抜く人材育成のために幼児教育に投資することが重要であるとの認識を高めている国々では、「質の高い保育」の実現に向けた取り組みも進められている。

OECD 加盟国の中でもスウェーデンは、保育の質が高いことで知られている (OECD, 2011)。その代表的な保育方法は、伝統的なテーマ活動を発展させたプロジェクトであり、白石は、「子どもの生活や身近な事象からテーマを取り上げ、それを子どもと保育者が一緒に自由な方法で探究したり、描画や造形表現、ファンタジーの遊びなどへ発展させていく活動」であると定義づけている (白石, 2013)。子どもたちは自らが興味・関心を持ったテーマを保育者と共に長期間探究していくプロセスの中で、様々な学びを得るのである。また、スウェーデンではこうした学びのプロセスを記録し、それを使って同僚の保育者や子ども、保護者と共に話し合い、リフレクションする機会を設けている。白石は、「保育者の観察メモ、録音テープ、写真、ビデオなどを用いて、保育のプロセスが見えるように作成した記録文書」のことをドキュメンテーションと定義づけている。さらに、この「記録文書としてのドキュメンテーション」を資料として、これまでの活動のプロセスを振り返り、省察し、子どもの成長や学びにとって

よい展開につながるように検討する活動／作業方法」のことを教育的ドキュメンテーションと定義づけ、スウェーデンで使用されている両者の意味合いの違いを示している（白石, 2018）。そして、スウェーデンではこの教育的ドキュメンテーションを行うことが、就学前学校の責務としてナショナル・カリキュラムに位置づけられているのである（白石, 2018）。

ところで、愛知淑徳大学では毎年スウェーデン研修を行っており、株式会社「Wåga & Wilja」（以下では、ヴァーガ・ヴィリアとする）が運営する就学前学校において、数日間の観察実習をさせていただいている。その交流事業の一環として、今年度もスウェーデンからヴァーガ・ヴィリアの就学前学校で勤務している保育者を本学にお招きし、2019年7月17日に「教育的ドキュメンテーションを活用したスウェーデンの保育実践 広い空間を探求する子どもたち」と題した学術講演会を開催した。本稿は、その講演内容を記録したものである。記録作成は、通訳の方にいただいた下訳の資料及び講演会当日の音声記録に基づいて行った。また、本稿は必要最低限の意識及び加筆、修正を行っている。

講演会の講師は、ソーレン就学前学校に勤務している保育者のアン＝ヘレン・グラフィネさんと、オルゴナ就学前学校に勤務している保育者のアンナ・ウィデンさんである。アン＝ヘレンさんとアンナさんはそれぞれ別の就学前学校に勤務しているが、ともに2016年生まれの2歳児クラスを担当しており、今回は各就学前学校に共通するテーマの取り組み内容を中心にご講演いただいた。参加者は本学学生含め約130名であった。

**愛知淑徳大学福祉貢献学部公開講演会**  
**教育的ドキュメンテーションを活用したスウェーデンの保育実践**  
**～広い空間を探求する子どもたち～**

日時：2019年7月17日（水）13：30～16：30

場所：愛知淑徳大学7号棟4階741教室

講師：Anna Widén（Orgona 就学前学校）、Ann-Helen Grapne（Solens 就学前学校）

通訳：小針健太郎                      スライド訳：岡田泰枝、水野佑規子、白石淑江

記録：水野佑規子

**スウェーデンの就学前学校のカリキュラムとヴァーガ・ヴィリア**

ヴァーガ・ヴィリアの就学前学校は、ストックホルム周辺の異なる地区にあり、各就学前学校には約100名の子供が通っている。ヴァーガ・ヴィリアでは、ローリス・マラグッチィの指導の下、イタリアで発展したレッジョ・エミリアの哲学に触発された教育を行っている。ローリス・マラグッチィは、「私たちの活動を的確に言い表す言葉は探究と参加である」と述べて

いる。新しい発想は、多種多様な点で既成概念の境界線を飛び越えていくものだとみなされている。例えば、高度な理論的研究と子どもたちに関わる実際的な経験を組み合わせるようなかたちがそれにあたる。人は遊びと仕事、現実と空想を組み合わせ、多くの異なる表現を同時に使いこなしているのである。

スウェーデンのすべての就学前学校は、子どもの権利に関する条約から出発している。この条約では、すべての子どもたちには平等な権利と同等の価値があるとされ、子どもにとって最善の利益が第一に置かれている。日本においても、この条約がガイドラインとして存在しているが、スウェーデンでは 2020 年 1 月 1 日から法律として施行される。

スウェーデンの就学前学校は、学校庁 (Skolverket) が発行するナショナルカリキュラムによって運営されている。ナショナルカリキュラムには、教育の目標とガイドラインが示されている。

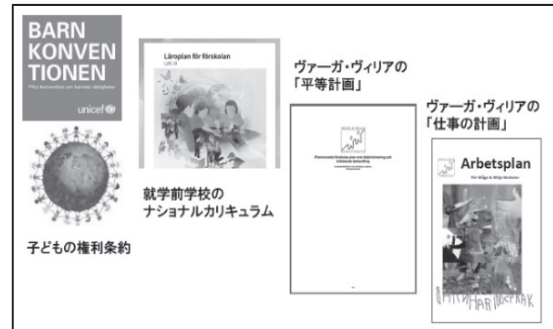
また、各就学前学校には独自の平等計画 (Likabehandlingsplan: Equal Treatment Plan) がある。その計画には、どのように就学前学校が差別と暴力的行為を防止し、予防の啓発に取り組むかが記載されている。多民族社会のこの国では、すべての子どもたちが同じ権利と機会を得られるよう、特に力が注がれている。

さらに、ヴァーガ・ヴィリアには仕事の計画 (ArbetsPlan: Work Plan) がある。この計画では、ナショナルカリキュラムと平等計画の観点から保育者や職員がどのような姿勢をとるべきであるのかについて

取り上げている。その中において、どのような価値観を持つべきかについてや、子どもへの知識の見方、並びにヴァーガ・ヴィリアの就学前学校に適用すべき保育及び行動方法について示されている。

ヴァーガ・ヴィリアの就学前学校では、子どものグループごとに環境と教材をよりよく適合させることができるよう、年齢別にクラスが分かれている。そして、いずれの就学前学校においても真ん中に大きなアトリエがあり、そこで子どもたちは様々な芸術的表現方法に接する機会を得ることができる。すべてのクラスには小さなアトリエがあるが、大きなアトリエでは子どもたちが幅広い教材を手に入れること

ができる。子どもたちはそのアトリエにおいて自分の様々な芸術的言語を用いることができ、新たな技法と表現するための素材を獲得する。保育者が意図するところは、子どもたちが教養を身につけ、自分の感情を表現するためには 100 通りもの方法があるのだということを理解することであり、言い換えれば、自らの考えや体験をかたちづくり、コミュニケーションをとるためには数多くの表現方法があるのだということを伝えることである。



## 子どもたちが素材と出会うこと

子どもたちがグループで取り組むプロジェクトは、就学前学校で子どもたちがグループで過ごす時間を通じての文化として築かれる。最も小さな子どもたちにとって、プロジェクトを行うことは自分自身と他者との出会いを意味している。子どもたちが互いに出会うことや、その環境、様々な教材、学習道具に焦点を置く。年齢が進むにつれて、子どもたちの関心や質問は発展し、深まっていく。子どもたちの内に生じる感情は、それを表現する機会が与えられ、100の言葉を通じて理解される。このプロジェクトという教育手法は、子どもたちの学習ストラテジーを発展させる土台を与える。

### ①子どもたちとの出会い

子どもたちが就学前学校へやってくる初日から、すでに互いの出会いはこの活動の中心的な部分となっている。保育者は子どもたちが大小さまざまな大きさで構成されたグループ内で他者と出会うことができるよう、積極的に仕向けている。ここで子どもたちは協調性、熟考する姿勢、積極的な行動方法、率先して行動する能力、共感する能力、柔軟性、創造性、空想力、好奇心、学ぶための方略（学習ストラテジー）、表現力といった能力を発展させる機会を得る。これらの能力を備えた子どもは、変化に富む世界の中で生きていくための、輝かしい必要条件を備えることになるだろう。

### ②森との出会い

森へ出かける時には、手をつなぎ、列に並んで、一緒にまわっていき練習をする。森への道は長くはないが、好奇心のある2歳児と一緒にだと、途中で何度も立ち止まることになる。森は自分のありのままの運動能力を試す雄大な大地やよじ登る岩、その上でバランスをとるための丸太、跨いだりその上を歩いたりしていく根っこ、入り込める小さな洞のある木を提供してくれる。

森の中では子どもたちと共に様々な感覚を用いた経験をする。耳をそばだて、匂いをかぎ、感じ、色々なものを見届ける。保育者は森が提供してくれるものに子どもたちが注意を向けるよう仕向ける。ある時、何かを発見するために上や下を見たりしなければならぬし、何かを見逃してしまわないようにかがまなければならないこともあれば、よく観察するために立ち止まったり、見つけたものについて話したりすることもある。子どもと共に体中で探究するのである。

### ③色との出会い

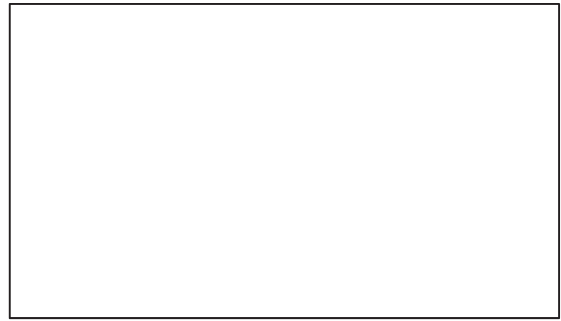
子どもたちは色と出会い、絵を描く時には必要な素材に責任を持つことを学ぶ。どれくらいの水が必要か。絵筆はどのような触り心地か。絵筆をきれいにするためには、どれくらいの時間水で流す必要があるのか。子どもたちが絵を描きたい時には、子どもたちが自分自身でその機会を得られるようになってほしいと保育者は望んでいるし、そのように望むのであれば、子どもたちは小さい時から自分で素材を扱う



必要がある。

#### ④水との出会い

子どもたちは水と出会って探究する。水を注いだり、様々なじょうろに水を汲んで注いだりすることで、水の物理的性質に接することができる。保育者は、満杯、からっぽ、たくさん、少し、軽い、重い等々の概念を用いることによって、子どもたちの行っていることを言葉に置き換えて伝えていく。子どもたちは年間を通じて水と出会う。気候によって、個体、液体、気体という水の全ての自然状態が引き出されるからである。



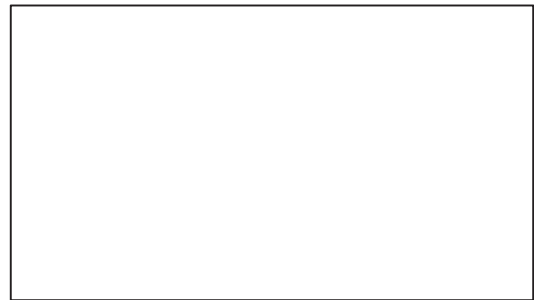
#### ⑤粘土との出会い

子どもたちは粘土と出会って探究する。子どもたちは粘土の性質を体験し、自分がどうやって粘土でかたちづくることのできるかの経験を積む。粘土は、小さな粒にちぎってからもう一度一つに固めることができるし、刃物で切り分けたり、道具で押し切ることもできる。



#### ⑥砂との出会い

水や粘土、砂といった様々な素材と出会う機会を通じて、子どもたちは結論を導き出し、各々の特性に応じて異なる素材を分類できるようになる。子どもたちは粘土は同じ形のままであるのに、砂や水は流れ出すこと、砂は小さな山になって残るのに、水はこぼれるとどこかへ消えてなくなってしまうことを理解できるようになる。また、屋外でそれらの素材を混ぜ合わせて何が起こるのを見ることができる。子どもたちが大きくなるにつれて、それらの素材を用いた挑戦と技術は一層複雑になっていく。



### 教育的ドキュメンテーションの段階

教育的ドキュメンテーション (Pedagogical Documentation) はヴァーガ・ヴィリアの就学前学校に勤務している保育者が今現在用いている保育実践の方法である。図1の教育的ドキュメンテーションの段階を示した円形チャートは、保育者がどのようにこの作業を進めているのかを示している。これがヴァーガ・ヴィリアの就学前学校のプロジェクト展開の基礎になっており、いつも「1. 観察」の領域から始まる。

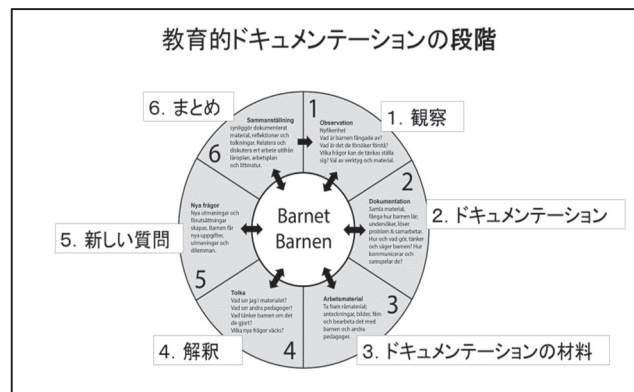


図1:「教育的ドキュメンテーションの段階」

1. 観察

子どもたちは何に夢中か、何を理解しようとしているのか、どのような質問を投げかけてくれるか、道具と素材を選定する。

2. ドキュメンテーション

素材を集め、子どもたちがどのように学び、調べ、問題を解決し、協力し合ったかを尋ねる。子どもたちは何をどのように行い、考え、発言しているか、どのように協力し合っているのか。

3. ドキュメンテーションの材料

生の材料、ノート、絵、動画を使って、子どもたちや他の保育者と保育を進める。

4. 解釈

その生の材料に何を見出したか、他の保育者はどうか。子どもたちは自分たちが取り組んだことについてなんと考えているか、新しく疑問が出てくるかを解釈する。

5. 新しい質問

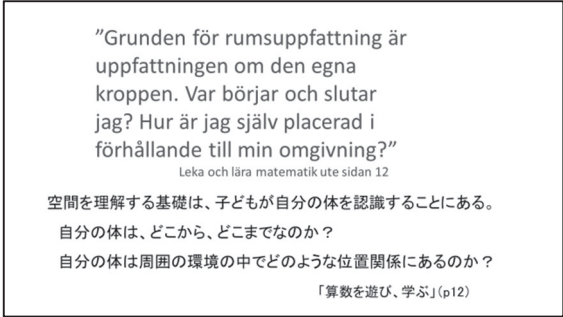
新たな挑戦と土台が形作られる。子どもたちは新たな課題や挑戦すべきことを得て、ジレンマに立ち至る。保育者は子どもたちに新しい質問を投げかける。

6. まとめ

記録された素材や思案した内容、解釈を可視化する。ナショナルカリキュラムや仕事の計画、参考文献と保育を関連付け、議論する。

図1のように、子どもの興味・関心が出発点だということを示すために、矢印は中心に置かれている子どもへ向かっていると同時に、子どもからも戻ってきている。

ヴァーガ・ヴィリアの就学前学校において、この段階に沿った保育が実際にはどのように行われているのか、次項では年間を通して空間認識を探究していく取り組みを行った2歳児のグループで例を示す。空間認識の概念についてコンセンサスを得るために、保育者は『戸外で数学を遊んで学ぼう』という本から次のように引用をした。「空間認識の基本は自分の身体についての理解にある。自分はどこで始めてどこで終わるのか。周囲の状況からしてどこに身を置くべきか。」



教育的ドキュメンテーションの段階 —空間の探究のプロジェクトに基づいて—

1. 観察

新学期が始まると、保育者は子どもたちが何に興味・関心を持っているのかといった、好奇の目でいつも子どもたちを観察している。子どもたちがどのような質問を投げかけてくれるか、道具と素材を選定する。2歳の子どもの保育に携わっていると、子どもたちは同じようなものに興味・関

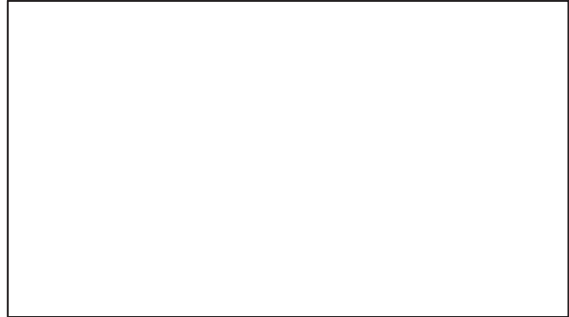


心を抱き、探究するということが分かった。子どもたちは周囲の状況を探究するために、頻繁に自分の身体を用いる。子どもたちがしばしば道具や素材として椅子を用いようとするが見えてきた。

子どもたちは互いに協力し合って自動車やバス、列車、飛行機を生み出した。椅子の下に潜りこんだり、椅子の上に座ったり、椅子の上で横になったりと、子どもたちは様々な方法で椅子を探究した。子どもたちは「何人分のスペースがあるか」「自分が入ることのできるスペースはあるのか」といった様々な問題にも直面した。

子どもたちは室内と同じくらい屋外でも活動しており、屋外においても空間の広がりを探究している姿を見ることができた。子どもたちが石の上に何人乗ることができるかを試すことで、空間の広がりを探究することが分かった。それと同時に、子どもたちは自分の空想する力と協力する力も探究していた。保育者は子どもたちに「何をしているの？」

「どこへ行こうとしているの？」と、質問するよう努めた。



## 2. ドキュメンテーション

子どもたちが素材や品物をどうやって取り扱うのかを調べる。子どもたちはどのように行動し、何をしようとしているのか。また、何を考え、どのようなことを話しているのか。子どもたちはどうやってコミュニケーションを図り、協力し合っているのか。保育者は子どもたちが学び、行い、調べたことを写真に撮り、撮影することで記録（ドキュメンテーション）している。

記録して分かったことは、「子どもたちが探究し、学ぶための道具として身体を用い、そこから身につけたことを参考にしている」ということである。子どもたちはベッドの上と下にどうすれば自分のスペースを確保できるか、どうすれば一つのベッドに何人分のスペースを確保できるか、ということを探究している。また、子どもたちが段ボール箱の中に入って座ろうとする時、箱の中で足を伸ばして座ることができるか、それともつま先は箱の穴から外に出さないといけないのかを考えている。



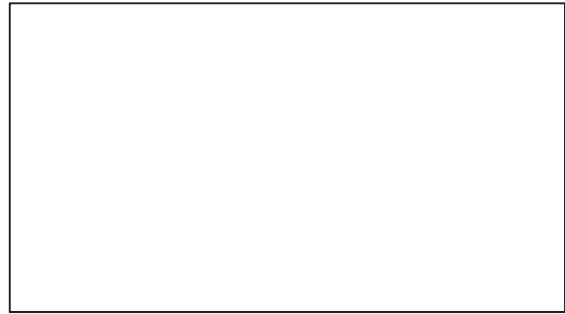
## 3. ドキュメンテーションの材料

私たちは生の材料、ノート、絵、動画を使って、子どもたちや他の保育者と一緒に保育を進めている。保育者は子どもたちが体験してきたことを一緒になって追体験する。新しく、好奇心あふれる考えや質問



が飛び出し、新たな探究を呼び起こす。

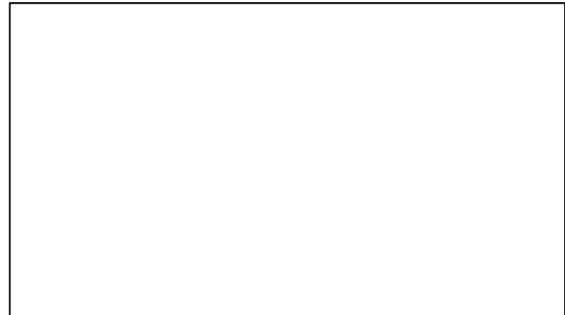
子どもたちに体験したことや行ったことを思い返してよく考える機会を与えるために、保育者は写真を撮って、その後、子どもたちの目線の高さに張り出す。そうすることで、子どもたちは体験したことを思い返し、よく考え、友達や家族に見せることができる。それらの写真は、これからの遊びのインスピレーションとなり、子どもたちの言語能力を発達させるのである。



また、保育者と子どもたちが共に iPad で写真を見ることで、記録したことを一度に振り返ることができる。今後も保育を進めていけるよう、保育者は子どもたちのコメントをピックアップする。

#### 4. 解釈

生の素材に何を見出したか、他の保育者はどうか、子どもたちは自分たちが取り組んだことについてどのように考えているか、新しく疑問が出てきたかについて考える。



子どもたちが自分の身体を用いてどのように様々な領域を探究しているのかを保育者は見ることができた。例えば、「ここに自分が入ることのできるスペースはあるのか」「ここには何人分のスペースがあるのか」ということである。担当しているクラスの子どもたちがまだ幼く、一部の言語能力が未発達であれば、大人が状況に応じた解釈をしなければならない。一枚の写真には多くの異なる解釈があり得る。保育者として積極的な選択を行い、今現在焦点を当てていることに応じた解釈をする。



保育者は子どもたちが探究をさらに進めていけるよう、より多くの様々な素材を必要としていると解釈した。保育者は保護者と給食室の職員に、担当のクラスのために段ボールをとっておくように頼んだ。新しい多くの段ボールにより新たな遊びと発見が触発され、それらは新たな試みへとつながっていく。子どもたちにとって、友だちの後に続いて段ボール箱の上に登るのは楽しいことであると理解した。



また、時に子どもたちは防水シートを道のように重ね合わせる。先頭を歩いている子どもが通り道を作り、他の子どもたちはその子の遊びについていく。子どもたちは真似ることで互いに触発し合っている。

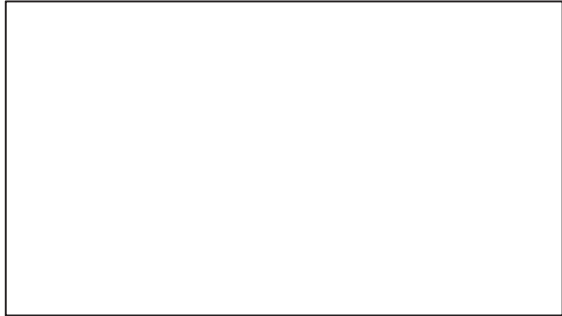
このように、子どもたちは身近な素材を、自分たち自身の新しい方法で使っていることが分かる。一



人ないしは数人の子どもがある種の通り道を創り出し、遊びのイニシヤチブをとる。子どもたちは、バランス感覚、協調性、模倣する能力を発揮することによって、自らの力を試している。身体能力が様々な素材によって、色々な方法で試されている。

保育者は、子どもたちが能力を発揮し、インスピレーションを得るためには、大人と共に遊ぶことが重要だという解釈をする。大人が子どもたちの遊びに参加する時には、より多くの子どもたちが参加できるようにしたり、素材に目を向けられるように盛り上げたり、より多くの質問を投げかけたりすることがある。例えば、「乗り物に乗ってどこへ行くの？」や、「みんなしっかり掴まったかな？」などといった具合である。子どもたちが何かの乗り物に乗って、席について同じ方向へ向かおうとしている姿を目にし、子どもたちが車やバス、列車に乗っている様子を表す言葉を耳にするのである。

子どもたちは戸外での環境であっても自分の体を使って探究する。保育者は子どもたちが自分の身体を使ってどのように滑り台を探究しているのかを見ることができる。子どもたちは滑り台に尻をつけて座り、前を向いて滑った経験はあるが、何かを試そうとする発達の欲求を持っているため、うつ伏せや仰向け、後ろ向きで滑ったり、友だちと手をつないで滑ったりしようとする。また、子どもたちは滑り台を滑るために、どのような方法で上に上がることができるかについても試そうとする。「自分の腕が両サイドの手すりに届くか」「幾通りもの方法で上がれるか」などと考えているのであろう。このように、保育者は子どもたちが体を使うことによって距離を体験しているということに気づくことができる。時に、



子どもたちは「このシーソーには何人乗れるか」と試す。保育者は、子どもたちが互いを真似て同じ方向を向いてシーソーに乗っている姿を見ることができる。子どもたちは一緒になってどこかへ出かけようと空想を膨らませているのである。



森へ行く時は、休憩用のテントとなる防水シートを持っていく。すると、子どもたちはテントには何人分の場所があるかについて探究する。また、森へ行くと、子どもたちが中で遊べるようになっている小屋もある。そこには何人が入ることのできるスペースがあるか、小屋の中には、順番を代わり合って入らなければならないかについても探究するのである。

## 5. 新しい質問

新たな挑戦と土台がかたちづくられる。子どもたちは新たな課題や挑戦すべきことを得て、ジレンマに立ち至る。遊びと学びには関連性がある。子どもたちがテントや小屋での遊びをどのように発展させ、自分が高いところにいるということをどのように表現するのかを見ることがある。時には、保育者が子どもたちにあえて新しい質問を投げかける必要

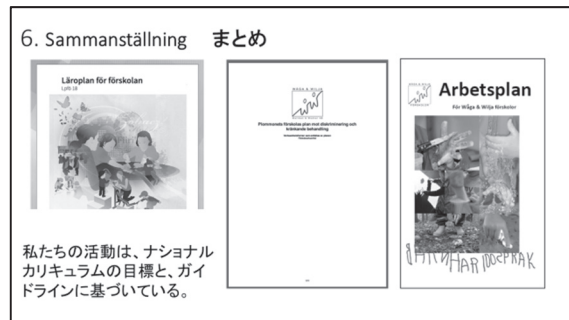


性が出てくる場合もあるが、ほとんどの場合、それは自然に行われる。

これまでの経験をもとに、子どもたちが自分自身の周りにブロックで壁を築いている様子を見ることがある。その数日後には、子どもたちが動物用に壁を築いている姿を見かけることもある。

## 6. まとめ

図 1 の教育的ドキュメンテーションの段階が一巡したら、子どもたちの学びや発達のプロセスをまとめて伝える時期となる。その内容は、ナショナルカリキュラムやヴァーガ・ヴィリアの仕事の計画に記載されている目標とガイドラインと関連付けて議論される。



## アプリを使った保護者とのコミュニケーション

ヴァーガ・ヴィリアの就学前学校では、子どもたちが学んだことや発達の様子をまとめ、保護者とコミュニケーションを図るために、ティーラ (Tyra) というアプリを使っている。保育者がそのアプリにドキュメンテーションをアップすると、保護者の携帯電話でそれを見ることができる。こうしたドキュメンテーションは、子どもたちが就学前学校に通っている期間中、常に見ることができる。



コミュニケーションアプリ・ティーラに投稿した、空間の広がりを探る月組の子どもたちのブログの記事を以下に例示する。

保育者が観察していると、子どもたちは机の下や椅子の後ろに座ったり、本棚の棚板のような狭い空間に入り込んだりすることが分かった。子どもたちは少し高さのある所に身を置いて、そこからジャンプすることを好み、様々な素材で通り道を築き、互いにそれぞれの後ろについてその上を歩いている。子どもたちは鞆に荷物を詰め、おもちゃを他のおもちゃの中に詰め込んでいる。子どもたちは荷造りした自分の鞆を背負って、旅行のごっこ遊びをしている。子どもたちが自分自身とものの両方を用いて、どこに自分のスペースを確保することができるかを、どのように試しているのかが分かる。子どもたちの遊びに何が起きるのかを理解するために、段ボール箱を提供することにした。



段ボール箱はすぐさま人気を博した。子どもたちは段ボール箱の中に一人で座ったり、友だちと一

緒になって座ったりして試していた。子どもたちは複数の段ボール箱を一行に並べて旅に出る遊びをしていて、段ボール箱は自動車やバスになったり、列車や飛行機になったりした。子どもたちは荷造りした自分の鞆を持って箱の中に入る。ぬいぐるみや人形も一緒に連れていった。

保育者は子どもたちの荷造りをさらに促すために、様々なサイズのパイプを組み立てて、ボールと一緒に詰められる容器を準備した。保育者は子どもたちが何を探究しているか、どのスキルを練習しているか、遊びを通じて、どのように空間の広がりや空間認識を様々な方法で探究するのかを理解している。

保育者は、子どもたちが遊びの中において飛行機に乗ってタイへ行くというように自分自身の経験をアレンジし、なぞっているということを理解している。また、子どもたちは荷造りを通じて、分量やどのような素材を別の素材に詰めるのかについて探究しているということも理解している。また、保護者は子どもと保育者が就学前学校で何をしているのかについて、コミュニケーションを図ることができる。

多くの保護者は、自分の子どもを迎えに来た時にはすでにティーラでそれについて学んでおり、子どもとその日に何をしたのかをやり取りすることができる。多くの保護者は、時間と状況が許す限り、自分の子どもたちと共に自宅でティーラを見ている。就学前学校において何をどのように行ったかを自分自身で伝えるといった、子どもたちに関わるすべてのリフレクションがその子固有の発達と学びにとって重要な土台となっていく。子どもたちは自分の経験を統合し、結論を導き出し、新たな挑戦を待ち焦がれる機会を得るのである。

保育者はどのようにして子どもたちが何かを学んだと理解するのか、子どもたちの遊びがどのように発展し、自分の経験と学んだ概念を新たな状況に活かしているのかについて把握している。空間の広がりに関して言えば、子どもたちは段ボール箱の中にもう入り込もうとしなくなる時期があることを了解している。この時点ですでに子どもたちはその空間に何人分のスペースがあるかを知っており、人数の判断を行っている。子どもたちはより良い身体上のイメージを得ているのである。保育者は、子どもたちが就学前学校で行ったことを追体験しているというフィードバックを各家庭から得ている。

この教育方法で良好な結果をもたらすためには、寛容で、子どもたちが本当に行おうとしていることに好奇心のある保育者が求められる。もし、保育者が「椅子は持ち出して遊んではいけません。テーブルの脇に置いておくものですよ。」というような保育者であれば、上記に記したような活動は一切起きなかったであろう。保育者が子どもたちにとってどのような存在であり、どのような存在になるべきかということは、子どもの持ち合わせている発達と学びの可能性を見極める上で、非常に重要であ

る。

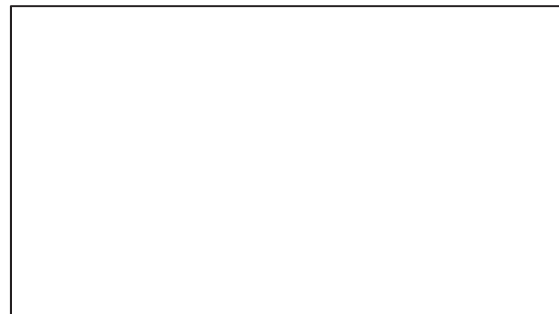
### ヴァーガ・ヴィリアの「仕事の計画」に記されている保育者の役割

ヴァーガ・ヴィリアの就学前学校の「仕事の計画」には次のように記載されている。

「仕事の計画」に掲げる保育及び行動方法を実践するため、保育者には以下の役割が求められる。

- ・紹介者：子どもたちを手助けし、周囲の環境及び、どの素材や教材が使える状態にあるのかを見せる役割が求められる。
- ・観察者：それぞれの子どもたちが周囲の環境や素材、他の子どもたちとどのように協力しているかを注視する役割が求められる。保育者が子どもたちをどのように促していくのかの出発点となるのが観察である。
- ・奨励者：意義深く、興味をそそられるような活動を設け、子どもたちに提供する役割が求められる。
- ・守護者／守り役：子どもたちが遊びや活動で困らないように、また、子どもたちが地面や素材、教材に触れることができるようにする役割が求められる。
- ・調整係／指揮者：適切な人数のグループに分かれ、就学前学校のあらゆる施設や設備を存分に用いることができるよう、子どもたちを手助けする役割がある。
- ・素材の調達係：興味をそそられてわくわくするような素材が豊富に利用できるようにしておく責任がある。
- ・子どもたちの模範になる役割：環境の整理整頓を日常生活の一部に組み込むべきであり、子どもたちは素材を分類して元に戻しておくことができるようになるべきである。
- ・広報係：保護者に子どもの置かれている環境は子どもにとって大きな意味を持っているのだと、啓発することができる役割が求められる。環境、素材、子どものグループは、その子の発育と学習に関してかなり重要である。

ローリス・マラグッチィは以下のように言っている。「想像力に富んだ子ども、その子どもはパワーと知力を内に秘めている。成長しようとし、学ぼうとし、



DET RIKA BARNET, med kraft och resurser i sig självt  
Loris Malaguzzi, Reggio Emilia  
能力と資質を備えた「豊かな子ども」  
ローリス・マラグッチィ(レジオンエミリア)

子どもたちは、成長したい、学びたいと願っている。自分の知識を生み出すことができるのは子ども自身である。子どもは本来そういう能力を備えており、百の言語を持った「豊かな子ども」なのである。

この子どもたちには大人が必要である。しかし、必要なのは、保護し、見守るだけの大人ではなく、一緒に世界を築くことができる大人である。子どもは自分ですべてを構築することができないので、子どもの声に耳を傾け見守ってくれる大人が必要である。そして、それは境界を超越するような思考に挑戦する大人である。

知ろうとする子ども、それは自分で固有の知識を創り出せる子どもである。内部に力を加え、100の言葉表現することができる子どもは、いわば創造力に富んでいるといえる。そのような子どもでも大人を必要としているが、それは単にあれこれ指図したり、監督に従わせるような大人ではなく、世界と一緒に創り上げていってくれるような大人である。子どもはすべてを一人で築き上げられるものではないため、耳を傾け、見ていてくれるような大人を必要としている。自分の考えを呼び起こし、共に限界を乗り越えていってくれるような、そういう大人をである。」

### 教育的ドキュメンテーションを保育チームで活用するために

教育的ドキュメンテーションに関わる作業をチームの中で上手く機能させるためには、各クラスのレベルにおいても、就学前学校全体のレベルにおいても組織が十分に機能していることや、時間を最大限に活かし、十分に活用すること、子どもたち、保護者、他の教育者と一緒になって熟慮すると共に驚きを感じる事が重要である。

教育的ドキュメンテーションに関する事は、必ずしも簡単なことではない。保育者は子どもたちが何を探求し、何に関心を抱いているのか常に理解し、知っているわけではない。同僚が欠勤してしまい、計画を実行できないこともある。そうした場合であっても、同僚や保護者と活発な議論や熟慮をひたむきに続けていきさえしていれば、とにもかくにも道は見つかる。子どもたちを保育していく中で、教育的ドキュメンテーションは保育者自身をも成長させる重要なツールであるのだと理解している。

保育者としては、実際に進めているプロジェクトを通して子どもたちが遊び、探究し、学び、楽しんでいる姿を見ることが、大きな喜びである。

### おわりに 一スウェーデンの保育実践から学ぶこと一

以上の講演内容は、一人の保育者が担当している2歳児クラスのプロジェクトを取り上げ、講師のお二人が協力してそのプロセスを考察し、まとめた内容である。以下では、講演会の資料作成やテープ起こしを担当した立場から、この教育的ドキュメンテーションを活用した保育実践からの学びを考察する。

#### ① ものや人との出会い

講演会序盤では、子どもたちが自分とは異なる他者と出会う様子に焦点が置かれ、友だちや森、色、水、粘土、砂との出会いが具体的に示された。大阪保育研究所は、2歳児の能動的な活動を促すものは、そのもの自身の可塑性が高く、自由に活動を展開させることができる素材であると述べている（大阪研究所、2004）。講演会において具体例として挙げた前述の素材は、まさにこれに当てはまる。また、加藤は、幼児前期は「自由に動き回る身体を使って、探究心や好奇心が強い知的要求として育ってい



く」時期であり、「水、砂、虫、植物に向けられる、子どもの不思議心は、『言葉にならない意味の世界（前言語的意味）』として身体の中に育って」いくと述べている（加藤，2012）。筆者がこれまでかかわってきた日本の保育施設においても、2歳児の子どもたちが外遊びや散歩の中で様々なものに出会い、五感を使って心を動かす体験をすることが大切にされていた。ヴァーガ・ヴィリアの就学前学校でも同様に、2歳児の活動では、様々な素材と出会い、ものの性質を身体全体で感じ、捉える機会を重視していることが分かった。特筆すべきは、子どもが様々な素材と出会う際の、保育者の捉え方である。講演会においても、2歳児は言語能力が発達途中であるため、保育者が状況に応じた解釈をすることが重要であると主張されていた。ヴァーガ・ヴィリアの保育者は、子どもの活動を「楽しんでいるか」「面白いかな」で判断するだけでなく、「子どもが今何を感じ、何を学んでいるか」について理論と結び付けて考え、理解しようと努めており、子どもの遊びを学びの過程として捉えていることが分かった。

## ② 教育的ドキュメンテーションの段階について

講演会では続いて、教育的ドキュメンテーションの段階について説明があった。それは、子どもが何に興味を持ち、何を理解しようとしているのかを観察することから始まり、子どもが何をどのように行い、考え、学んでいるのかを尋ねてドキュメンテーション（記録）を作成する。そして、記録としてのドキュメンテーションを基に子どもや同僚の保育者と共に話し合い、子どもの学びのプロセスを解釈し、新しい疑問や課題に向き合いながら保育を進め、最後にこうした学びのプロセスを可視化してまとめるという流れであった。そして、この流れの中心は常に子どもであり、記録に基づいた対話や活動プロセスの共有が、子どもと保育者、保護者の間で行われていることも確認された。

## ③ 2歳児の発達の特徴を捉えた保育実践のあり方

その後、この教育的ドキュメンテーションの段階について、2歳児クラスの子どもたちが空間を探究していく保育実践を例に挙げて具体的に説明がなされた。その中では、自分の身体を使い、椅子や戸外の遊具、段ボール箱等の空間をユニークな方法で探究する子どもたちの姿が生き生きと紹介された。神田は、2歳児は概念の世界へ足を踏み入れる時期であり、その概念は生活の密着したところから、生活の中でさまざまなものに出会う感動の中から生み出されるものであり、そうして獲得した概念は子どもの生活の面白さや興味深さを拡大させると述べている（神田，2004）。講演会の中でも、子どもが段ボール箱に何人分のスペースがあるかを理解した時、彼らはそれ以上段ボール箱の中に入り込もうとはしなくなっており、それは子どもたちがすでに人数の判断ができるようになったことを意味していると述べていた。加藤は、幼児前期は「身体で考える」時期であると述べたが（加藤，2012）、まさに、子どもたちが自分の身体を使って考え、探究することを通して、空間というものの概念を体験的に身に着けていることが分かる。また、活動の中で子どもたちは様々なものを自動車やバス、列車、飛行機に見立てていた。筆者がこれまで見てきた日本の保育施設においても、2歳児クラスの空間は「見立てあそび」や「つもりあそび」が豊かに展開されるよう工夫された環境構成となっており、その中で子どもたちがお店屋さんになりきったり、料理をつくったりする様子を見てきた。理論上でも、2歳児は「見立てあそび」や「つもりあそび」を盛んに行い、大人を介して子どもが友だち同士でイメージを共有しあうことができるようになる時期であるとされているが（大阪研究所，2004）（加藤，2012）、これは国を超えて共通する2歳児の特徴であることを理解した。これらのことから、今回ご紹介いただいた実践は、国を超えて共通する2歳児の発達の特徴や興味・関心を確実に捉えたものであり、空間を

探究するプロセスの中で、2歳児の子どもの持つ力や発達欲求が最大限に引き出されていたということが分かった。

#### ④ プロジェクトを進める保育者の役割と教育的ドキュメンテーションの意義

そして、この活動において最も忘れてはいけないのが保育者の存在である。講演会の中でも保育者の役割が様々紹介されていたように、この活動においても、保育者は子どもの学びのプロセスにおける適切なタイミングで質問を投げかけたり、新たな素材を提供して子どもの知的好奇心を刺激している。こうした保育者の働きかけが、子どもの探究をより豊かに深めていることは間違いない。そして、保育者が絶妙なタイミングでこのような働きかけを行うことができるのは、子どもの毎日の活動のプロセスを記録し、それを基に子どもや同僚の保育者と共に繰り返し話し合うことや、子どもが何に興味を持ち、何を学ぼうとしているのか、そのために何を必要としているのかを日々考え、解釈することを大切にしているからである。まさに、教育的ドキュメンテーションを行うことが子どもの深い探究と学びを支えているといえる。また、講演会の後半では、保護者とのコミュニケーションツールであるティーラというアプリについての紹介があった。ティーラを使うことで、保護者は子どもと就学前学校での活動を詳細に話し合うことができると共に、保育者は保護者から就学前学校において行った活動に関連する家庭での子どもの様子を知ることができる。ドキュメンテーションは、保護者と子ども、そして保護者と保育者をつなぐ役割も果たしていることが分かった。

最後に、この実践の最大の特徴は、子どもの興味・関心から活動が始まり、子どもの声や思いをもとに活動が展開されている点である。白石は、「遊びや活動は、子どもと保育者が一緒に作っていくもの」とし、「ドキュメンテーションを基にリフレクションすることが、子どもたちが興味を持ったことを調べたり、表現する活動を広げていく推進力、つまり『エンジン』になる」と述べている(白石, 2018)。また、加藤は、実践記録を書く最大の意味は、「書かれた事実の中に、明日の活動を見いだす点にある」と述べている(加藤, 2014)。

#### ⑤ 子どもを中心とした視点から保育を捉え直す

現在、日本では2015年度からすべての子どもの質の高い保育・幼児教育、子育て支援の提供を目指す「子ども・子育て支援新制度」が施行され、次いで2017年3月、保育所保育指針の改定および、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育保育要領の改訂が行われるなど、保育の大きな転換期にある。これらをふまえ、2019年6月に厚生労働省子ども家庭局が作成した冊子「子どもを中心に保育の実践を考える～保育所保育指針に基づく保育の質向上に向けた実践事例集～」では、子どもを中心とした視点から保育を捉え直すことによって見えてきた現状・課題の改善や、さらなる保育の充実に向けた取り組みを進めていくためのポイントの一つとして、「日々の保育の振り返り」を挙げている(厚生労働省, 2019)。日々の保育を記録すること、そしてそれを基に保育者間で話し合うことの重要性の認識は日本にも広まりつつあるように思う。そこからさらに、子ども中心の質の高い保育に向けて一歩進むためには、子どもとも記録を共有して話し合うこと、そしてそこからの活動をどのように展開していくかを子どもと共に考え、共に保育を創りだしていくことが重要であり、その点において教育的ドキュメンテーションを基に保育を進めるスウェーデンから学ぶべきものは多いと確信した。

## 謝辞

教育的ドキュメンテーションの活用方法について実践例を踏まえて分かりやすくご講演くださいました、アン＝ヘレン・グラフネイさんとアンナ・ウィデンさんに深謝いたします。

また、本文をまとめるにあたり温かくご指導いただきました愛知淑徳大学教授、白石淑江先生、准教授、岡田泰枝先生に心より御礼申し上げます。

## 文献

- 神田英雄（2004）『伝わる心がめばえるところ 二歳児の世界』かもがわ出版
- 加藤繁美（2014）『記録をかく人書けない人 楽しく書いて保育が変わるシナリオ型記録』ひとなる書房
- 加藤繁美（2012）『0歳～6歳心の育ちと対話する保育の本』Gakken
- 厚生労働省（2019）『子どもを中心に保育の実践を考える～保育所保育指針に基づく保育の質向上に向けた実践事例集～』
- OECD 編著（2011）『OECD 保育白書人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア（ECEC）の国際比較』明石書店
- 白石淑江・水野恵子（2013）『スウェーデン保育の今 テーマ活動とドキュメンテーション』かもがわ出版
- 白石淑江（2018）『スウェーデンに学ぶドキュメンテーションの活用 子どもから出発する保育実践』新評論
- 大阪保育研究所 年齢別保育研究委員会「0-2歳児の保育」研究グループ編（2004）『2歳児の保育』ルック